

## 再生医療 50カ国2500人討論

世界約50カ国の研究者や産業界関係者が集う「第5回国際組織工学・再生医療学会世界会議」が9月4～7日、京都市左京区の国立京都国際会館で開かれる。再生医療に関する国際会議の開催は国内で初めてという。

同会議には約2500人が参加予定。iPS細胞(人工多能性幹細胞)を使った組織を、

京で4日から、国内初

加齢黄斑変性の患者へ移植する臨床研究を実施している高橋政代・理化学研究所プロジェクトリーダーが基調講演する。

このほか細胞治療や遺伝子治療、組織工学、医療産業などに関する約110のシンポジウムがあり、幅広い分野から生体を活性化する再生医療を議論する。(広瀬一隆)



国際組織工学・再生医療学会世界会議の大会長を務める田畑教授(京都市左京区・京都大)

京大ウイルス・再生医科学研究所

### 田畑泰彦教授に聞く

# iPS細胞以外にも注目を

世界会議の大会長の一人、京都大ウイルス・再生医科学研究所の田畑泰彦教授に、再生医療をめぐる世界と日本の潮流の違いを聞いた。

国内ではiPS細胞(人工多能性幹細胞)を使った再生医療に期待が高まっている。

日本では再生医療というiPS細胞の専売特許のようなイメージがあるかもしれないが国外は違う。iPS細胞以外にもES細胞(胚性幹細胞)やほかの幹細胞などを使った研究が進んでいる。こうした研究にもぜひ目を向けてほしい。

iPS細胞で組織を作り直して移植する治療法は有効とされている。失われた機能を代替する組織を作るのはiPS細胞しかできない訳ではないし、細胞治療の狙いは機能の代替以外にもある。例えば脂肪幹細胞は、炎症を抑える物質を出し損傷した組織を修復できるという研究報告がある。幹細胞は、周辺にある細胞を活性化した

り過剰な免疫反応をコントロールしたりする性質を持つとされる。こうした効果を使うには、iPS細胞にこだわる必要はない。

細胞を使うこと以外にも再生医療はあるのか。

細胞が増殖しやすい寒天状の培養ゲルを体内に移植することなども再生医療に含むことができるだろう。やけどの治療などに応用が期待でき、必ずしも細胞を使う必要はない。細胞移植の時に、ゲルを使えば、細胞が増殖しやすい「足場」や養分を提供して治療を促すことにつながる。

日本で初めて国際的な再生医療に関する学会を開く意義は。日本の再生医療が「ガラパゴス化」しないためにも、研究者だけでなく企業関係者にも世界の潮流に触れてほしい。一方で、国外に向けて日本の中小企業の高い技術力を発信する機会にもなる。再生医療全体が活性化する機会にしたい。(聞き手・広瀬一隆)